

氏 名	オウ	マ	キ
	王	真	紀
学 位 の 種 類	博 士 （音 楽）		
学 位 記 番 号	博 音 第 143 号		
学位授与年月日	平 成 21 年 3 月 25 日		
学位論文等題目	〈論文〉クラシック発声～分析と総合～		
論文等審査委員			
（総合主査）	東京芸術大学	教 授 （音楽学部）	直 野 資
（演奏審査主査）	〃	〃 （ 〃 ）	直 野 資
（演奏審査副査）	〃	〃 （ 〃 ）	伊 原 直 子
（ 〃 ）	〃	〃 （ 〃 ）	檜 山 哲 彦
（ 〃 ）	〃	准教授 （ 〃 ）	佐々木 典 子
（論文審査主査）	〃	教 授 （ 〃 ）	直 野 資
（論文審査副査）	〃	〃 （ 〃 ）	伊 原 直 子
（ 〃 ）	〃	〃 （ 〃 ）	檜 山 哲 彦
（ 〃 ）	〃	准教授 （ 〃 ）	佐々木 典 子
（ 〃 ）	亀田総合病院	介護老人保健施設たいよう施設長	大 国 義 弘

（論文内容の要旨）

本論文は、クラシック発声について大きく二部に分けて構成される。第一部は“歌う”ことを「理論」的に、第二部では、“歌う”ことを「実践」を踏まえながら論じる。

第一部の理論編は、四つの章から成る。

第一章は、論者自身に起こった発声の障害から始まる。専門歌手が抱える問題を自身の体験を踏まえながら、解剖学、生理学的に見解する必要に至った理由を述べる。

第二章は四節に分けられ、障害を克服すべく、クラシック発声に關与する器官の普遍的な解剖学論について論じる。第一節と二節では、クラシック発声の呼吸に関する先行文献の研究とフースラーの研究を比較検討する。第三節では、呼吸器官と喉頭器官を解剖学的に見解し、第四節では、それらが良い発声器官として機能する為に重要な機構となる“喉頭懸垂機構”について研究する。

第三章では、クラシック発声に關する文献が必ずといって良いほど取り上げている“声区”と、今やフースラー語といってもよい“アンザッツ”の理論について、先行文献の研究とフースラーの研究を比較検討する。

第一部の最終章となる第四章では、本論文の主文献であるフースラーが、日本のクラシック声楽界においてどのような立場にあるのかを検証する。

第二部では、第一部で検証した器官が、歌う際にどのように働き、声を作り上げていくのかを、実践を踏まえながら述べる。また、自身の経緯を“言葉”だけでなく“音”で示すことを試み、CDという形で付録に添付する。

実践編は、三つの章から成る。

第一章は三節に分けられ、実際に“歌う”ことを通して体験してきたことが、喪失の原因になってしまふまでの経緯を述べる。第一節では、それまでの自身の練習方法を具体的に紹介し考察する。第二節

では、その練習中の演奏に第三者及び自身のトラブルが発生するまでの経緯を、第三節は、それまでの練習を分析し、声の喪失の原因を探究していく。

第二章では、自身の声の喪失という障害の分析と改善を求めていく過程で出合った、フースラーの文献を一つの提唱とし、それらを実行した際に、抱えていた障害が改善されるのか否かを、自らが実験台となって検証していく。検証の方法としては、フースラーの提唱を大きく五項目に分け、提唱を体得するべく、訓練や運動方法を探索していく。

第三章は二節に分けられ、第一節では第二章で検証した結果とその成果を述べる。第二節では、第一節で得た結果が、日々の訓練の積み重ねにより融合され、芸術的な発声に連結していくまでの過程を、理想を含めながら述べる。

これらのことから判明したことは、「理論」と「実践」、「具体的智識」と「抽象的表現」の融合である。それは一個体に止まらず、専門歌手に共通する事柄に発展していくだろう。本来ならば最終章が全体の“結論”ともなるべきであるが、事柄の性質上、一時的な結論に留まり、論文としては開いた形で終わる。

(博士論文審査結果の要旨)

本研究は論者自身に起こった発声の障害を起源として専門家の抱える問題を自身の体験をもとに医学的な解剖学、生理学的な図解を多様に用いながら必要性の理由が述べられ、クラシック発声の呼吸に関する先行文献の研究とフースラーの研究をも比較検討している。

章を変えて良い発声器官として機能する為の重要な機能となる咽頭懸垂機構について研究されたことをも提言している。“声区”とアンザッツの理論についても多く研究されている。申請者の歌えなかったことからの必死に腕苦しんだ緊迫感が伝わってくるのも事実である。この論文は今後の後輩学徒にとっての有効な参考文献となることであろう。

仮説をたてながらフースラーをそのまま受け入れるのではなく個々を分けながら正直に足りないところは足りないとして述べここに遊びの空間を持ちながら語られている。これこそ実技系の博士論文として望ましい論文が書けたと判断された。メンタルな域に触れてもらいたい心残りはあったものの専門医を含めた審査員全員で「合格」であるとの一致をみた。

(演奏審査結果の要旨)

王 真紀の課程博士最終学位演奏審査リサイタル、ベッリーニの「カプレーティ家とモンテッキ家」の演目でのシェーナを伴った演奏会が開かれた。

申請者本人の声帯トラブルから声を失った時期を挟んでその声が理性的、知性的な精神状態の回復を知らしめる演奏会であった。

本人のリスpektする名バリトン、マッティア・バッティスティーニに求めた発声法を感じさせるものとなった。特に中声域の音色は大変上質で心地良い響く声を出せる迄に戻っていた。あのトラブル前の声に蘇っていたのである。多少無理であるかと思われたアクト（高音）そのものを勇気を持って出せたことは評価したい。然し総てを誉めるものではない。高音が出てもそれにヴィブラートを伴った響きのアーチを生むティンブロでなければならないのだが、そこには未だ及ばなかった事が欲を言えば残念である。

博士課程を留学で挟んだ5年間のここ迄の困難を乗り越えて成長した演奏と成果を鑑みれば本日の演奏会は本人の将来性を如実に表現で出来たとし全員の教員が「合格」であるとの判断をした。